

◇◇ 総合医療センター 9階西無菌病棟のオープンについて ◇◇

総合医療センター血液内科 教授 木崎 昌弘

総合医療センターでは、現在全病棟の改築工事が進んでいます。西側病棟の工事は終了し、診療科の枠を超えたセンター化構想を基にした病棟再編も着実に進行しています。そのような中で、2019年7月9日（火）、9階西病棟に最新の設備を有する無菌病棟が誕生し、オープニングセレモニーが行われました。

造血幹細胞移植や大量抗がん剤による治療を日常的に行う白血病をはじめとする血液がんの治療には、安全に治療を行うための無菌室をはじめとする治療環境の整備が必須です。総合医療センターでは丸木理事長、堤病院長のご理解のもとに無菌病棟整備が承認され、この度、国内でも最高の設備を有する無菌病棟が完成しました。設計の段階から多くの関係者が関与し、昨年7月には施設課、工事を担当する熊谷組担当者、医師、看護師らが慶應義塾大学、順天堂大学の無菌病棟を見学し、これらの先駆的な病院の設備を徹底的に検証し、何度も推敲を重ねて設計図を作成しました。

今年2月には大雪の中、医師、看護師、移植コーディネーターによるチームが国内で最も進んだ移植医療を行なっている九州大学および久留米大学の無菌病棟を見学し、その運用面の実際を見学してきました。こうして、病棟全体の無菌度がクラス10,000（※）に保たれた4人床5室、そしてクラス1,000の個室6室の計26床からなり間接照明や洗面台、トイレやシャワー室などの細部にまでこだわった最新の無菌病棟が完成しました。

運用は血液内科に任されていますが、血液がんに対する造血幹細胞移植のみならず、進捗の著しいがん免疫療法など将来の新しいがん診療の進歩に対応できる病棟として、多くの診療科にまたがる「がん」に対する最先端の医療が総合医療センターで展開されることが期待されます。

※クラス10,000・・・0.5 μ mの粒子を基準とした1立方フィート (ft³) 中の粒子が10,000個未満（米国連邦規格）



病棟全体がHEPAフィルターを通し、無菌度クラス10,000に保たれている



クラス1,000に保たれた個室（6床）には、滅菌水製造装置も導入